



2026 AUTOBACS SUPER GT ROUNDS SUZUKA GT 300km RACE REPORT



SUPER GT 2026 第5戦 鈴鹿300km レースレポート

開催日：公式予選 8月22日(土)／決勝 8月23日(日)

開催地：三重県 鈴鹿サーキット

<予選レポート>

前回の第4戦富士大会では、BMW M4 GT3 EVO投入後の最上位となる予選13番グリッドを獲得。決勝はスタート直前に雨が降り出す難しいコンディションとなったものの、チームは状況を見極めながら戦略を組み立て、ポイント圏内を粘り強く走行した。惜しくもポイント獲得には届かなかったが、今季ベストの16位でフィニッシュ。結果以上に、チームが積み重ねてきたものが着実に形となり始めたことを実感できる一戦となった。これまで試行錯誤を重ねてきたベースセットアップに確かな方向性が垣間見え、レースペースにも改善が見られた。さらに決勝翌日に同地で行われたテストでも、後半戦を見据えてさまざまなメニューを消化し、貴重なデータを収集することができた。開幕から決して簡単な戦いが続いてきたわけではない。それでも、チーム全員で課題と向き合い、一步ずつクルマを進化させてきた。その積み重ねと富士で掴んだ確かな手応えを胸に、さらなるブラッシュアップを施した9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」とともに、PACIFIC RACING TEAMは8月22～23日に鈴鹿サーキットで開催された「2026 AUTOBACS SUPER GT Round5 SUZUKA GT 300km」へと挑んだ。

今回の第5戦鈴鹿大会は、前戦と同じ300kmレースということから、引き続き冨林勇佑選手と藤原優汰選手の2名体制で臨んだ。前戦富士で掴んだ良い流れをそのまま鈴鹿へと持ち込んだ9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」は、走り始めとなった公式練習からフィーリングも良く、チームは確かな手応えを感じていた。まずステアリングを握った冨林選手は、2周目に1分59秒021をマーク。ここから走り込んでさらなるセットアップを施していこうとした矢先、序盤から立て続けに2度の赤旗を挟む展開となってしまう。それにより十分な走行時間を得られないまま、わずか8周のみの走行で藤原選手に託すこととなった。その後、藤原選手は1分59秒964を

記録しながら13周を走行。しかし、序盤の度重なる赤旗の影響は大きく、セットアップを十分に煮詰めることに加え、決勝を見据えたロングランでのペース確認も満足に行えないまま公式練習を終えることとなった。ただ、少ない走行時間のなかでも10番手と好発進を決めた。PACIFIC RACING TEAMは、今まで積み重ねてきた方向性への確信をさらに深め、期待を胸に公式予選へと歩みを進めた。

多くのファンが詰めかけ、大盛況となったピットウォークを挟んでもなお、鈴鹿サーキットは蒸し暑さが残っており、気温34度／路面温度46度と公式練習時より上昇したなかで予選を迎えた。予選Q1 B組に出走した9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」は、藤原選手にステアリングを託した。午前の公式練習でのフィーリング、そして今回持ち込んだタイヤを信じ、藤原選手は焦ることなくじっくりとタイヤに熱を入れ、4周目にアタックを遂行。プレッシャーのかかる一発勝負のなかでも落ち着いた走りで全セクター自己ベストを刻み、1分57秒818を記録する。これで14番手から一気に2番手へとジャンプアップし、トップとはわずか0.334秒差。見事なアタックでQ2進出を決め、冨林選手へと最高の形でバトンをつないだ。藤原選手も「クルマもタイヤもとても高いレベルのところにあり、ドライバーとしても安心して攻めることができました」と、自身のアタックを振り返った。

藤原選手の力走によってチームの勢いはさらに増し、ピット内には今季ベストグリッドへの期待が広がっていた。その良い流れを冨林選手へと託し、いよいよ勝負の予選Q2へと挑んだ。心地いい緊張感がピットに漂うなか、バトンを受け取った冨林選手は、ウォームアップの段階から上位につけ、4周目にアタックへと入る。トップの車両に対してマイナス表示が灯り、全体ベストも狙えるペースを維持したまま最終セクターへ突入すると、セクター4ではライバルを約0.2秒上回る圧巻の走りを披露。1分56秒547を叩き出し、トップタイムをマークした。残り時間は残っていたものの、そのタイムを上回る車両は現れず、僅差のアタック合戦を制して冨林選手は自身初、そしてPACIFIC RACING TEAMにとっても初のポールポジションを掴み取った。長い歴史のなかで、チームが初めて手にしたSUPER GTでの予選最速の称号。グランドスタンドから大きな拍手が送られるなかピットへと戻ってきた冨林選手を、チームも満面の笑顔で迎える。チームに携わる全員で積み重ねてきた努力がひとつの大きな結果となって実を結び、喜びを分かち合う忘れられない瞬間となった。グランドスタンドから拍手喝采のなか温かく迎えられた冨林選



手は、チーム員とその喜びを分かち合った。

完璧なアタックでチームに初めてのポールポジションをもたらした畠林選手は「本当によかったという一言に尽きます。前戦富士大会後のテストで方向性が見えたなかで、みんなで意見を出し合ったことがすべてプラスに繋がりました。ミシュランタイヤさんとチームに助けをもらいながら力を出し切れた結果なので、とても嬉しいです」と喜びを滲ませた。長きにわたってSUPER GTへ挑戦を続けてきたPACIFIC RACING TEAMにとって、チーム創設以来初となるポールポジションは、歴史に刻まれる大きな一歩となった。しかし、チームが見据えるのはその先。初めて手にした最前列、最高のポジションからスタートできるこのチャンスを、次なる悲願である“初優勝”へと繋げなければならない。喜びをチーム全員で分かち合いながらも、決して浮き足立つことなく、ピットではすぐに翌日の決勝へと気持ちを切り替えた。この最高のチャンスを確実に掴み取るため、チームはいつも以上に集中力を高め、9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」を万全の状態で送り出すべく、決勝に向けた最後の準備を進めていった。

<決勝レポート>

ついに迎えた決勝日。この日も朝から強い日差しが照り付け、気温34度／路面温度49度と前日と同様に真夏の暑さが残っていた。決勝前に行われた20分間のウォームアップ走行でも、予選から続く好調さを維持。前日からチーム全員で入念に準備を整えてきたこともあり、フィーリングにも確かな手応えを感じ、自信を持って決勝レースへと臨んだ。3万2000人もファンが見守るなか、藤原選手はホームストレートに並ぶグリッド最前列に向けてクルマを運んだ。期待と緊張感が入り混じるなかスタート進行が進められていたが、藤原選手の無線が全く機能しないというトラブルが発生。だが、スタートまでの残された時間のなかで、最後まで諦めずに対応したスタッフの働きによって事なきを得



て、藤原選手も安心してコクピットへと収まり、いよいよ運命の300kmレースが幕を開けた。自身にとっても初となるポールポジションからのスタートに「今までにないくらい、とても緊張していました」と語る藤原選手は、ミシュランタイヤのウォームアップ性能を活かして落ち着いてホールショットを奪い、幸先のいいスタートを切って見せた。ライバルたちが2番手争いを繰り広げる間にも着実にリードを築き、2周目には1分59秒816の自己ベストをマーク。その後も安定したラップを刻み続け、15周目を迎える頃には後続に5秒以上のアドバンテージを築き上げた。決して焦ることなく、淡々と、そして冷静に自らのステイントを遂行し、トップの座を一度も譲ることなく24周を走り切り、ピットイン。

藤原選手が築き上げたリードを守り抜くべく、メカニックたちは4本のタイヤ交換を含むピット作業を迅速かつ正確に遂行。プレッシャーのかかる場面でも見事なチームワークで送り出し、最後のバトンを冨林選手へと託した。ピット作業を終えた車両の先頭でコースへと復帰した冨林選手も、その想いに応えるかのようにフレッシュなタイヤを活かして序盤から猛プッシュ。27周目には1分58秒460というファステストラップを叩き出した。上位勢のなかにはタイヤ2本交換によって逆転を狙うライバルもいたが、その戦略をも寄せ付けない圧倒的なペースで周回を重ね、さらに勢いを加速させていく。そして33周目、全車がピット作業を終えたところで、9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」は再びトップの座へ。その後も冨林選手の勢いは衰えることなく、ライバル勢を約0.5秒上回るラップタイムを刻み続ける。周回を重ねるごとにその差は広がり、後続に15秒以上ものアドバンテージを築く圧巻の走りで、レースを完全にリードしていた。残り周回数を消化していくうちに、初優勝が少しずつ現実味を帯びてくるものの、レースは最後まで何が起こるか分からない。ピットでチーム全員が息を呑んで見守りつつ、何が起きても対応できるように備え、誰ひとりとして気を緩めることはなかった。

ピットではチーム全員が手に汗を握りながらタイミングモニターを見つめるなか、残り5周というところでGT300クラスの車両がクラッシュ。FCY(フルコースイエロー)が導入されると、車両回収などの作業に時間を要することから、すぐさまSC(セーフティカー)へと切り替えられた。これにより、冨林選手が懸命な走りで築き上げてきた15秒以上ものアドバンテージは一瞬にして消滅。初優勝を目前にして訪れたまさかの展開に、ピットには再び張り詰めた空気が漂う。レース再開となれば、後続を従えての一発勝負。チーム全員が固唾を呑み、ただひたすら状況を



見守った。しかし、残された周回数のなかでSCが解除されることはなく、SC先導のままチェッカーフラッグが振られ、富林選手がトップでコントロールラインを駆け抜けて、チェッカーを受けた。ピットでは誰もが喜びを爆発させ、悲願達成の瞬間を分かち合った。これまで積み重ねてきた努力も、思うような結果に繋がらなかった悔しさも、そのすべてが報われた瞬間だった。

クルマから降りた富林選手も藤原選手と抱き合い、直後のインタビューでは「勝ったぞー!」と嬉しさを滲ませていた。サーキットに響く歓声と拍手に包まれながら、PACIFIC RACING TEAMはチーム創設以来初となる勝利の喜びを、全員で噛み締めた。予選ではチーム初のポールポジションを掴み、その座を一度も譲ることなく勝ち切るという完璧なレース運びで、これ以上ないポール・トゥ・ウインでの初勝利。藤原選手がスタートから築き上げたリードを、メカニックたちが完璧なピットワークでつなぎ、最後は富林選手が圧巻のペースで守り抜き、まさにチーム一丸でのパーフェクトウインだった。また、9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」を支える中日本自動車短期大学(NAC)の学生メカニックのなかには、今大会を最後にチームを離れ、卒業を迎えるメンバーもいた。これまでチームとともに戦ってきた彼らにとって、何ものにも代えがたい最高の贈り物となった。

チーム創設以来初となるポールポジション、そして悲願の初優勝をポール・トゥ・ウインという最高の形で成し遂げたPACIFIC RACING TEAM。長きにわたる挑戦のなかで積み重ねてきた努力が、ようやく大きなひとつの結果として実を結んだ。チームにとって決して忘れることのできない一戦となったが、この勝利はゴールではなく、新たな一歩でもある。今回掴んだ大きな自信と手応えをさらなる力に変え、シーズン後半戦でもより高みを目指していく。初めて味わった勝利の喜びをもう一度チーム全員で分かち合うため、気持ちを新たに、次戦に向けてチーム一丸となって準備を進めていく。



COMMENT

2009年、鈴鹿サーキットで開催された「ポッカ1000km」へのスポット参戦から、PACIFIC RACING TEAMの挑戦は始まりました。

翌2010年からはLMPLレーシング様と共に、SUPER GTへの本格参戦を開始。さらに2011年からは『侵略!イカ娘』とのタイアップ参戦をスタートし、以降数多くの素晴らしいキャラクターコンテンツとタイアップを実施してまいりました。



エントラント代表
神野 元樹

※キャラクターコンテンツコラボレーション実績

2011-2012年	侵略!イカ娘 (SUPER GT)
2013年	攻殻機動隊ARISE (SUPER GT)
2014-2015年	ラブライブ! (SUPER GT/D1 GRAND PRIX)
2015-2018年	ガールズ&パンツァー (D1 GRAND PRIX)
2019年	ミライアカリ
2022年	hololive(ホロライブ)
2023-2024年	ぶいすぽっ!
2025年	『アイドルマスター』シリーズ
2026年	『ウマ娘 プリティーダービー』

また、サーキットの華であるレースアンバサダー活動においても、2017年には「日本レースクイーン大賞」にて史上初となる3冠(グランプリ・新人部門・コスチューム部門)を達成するなど、ありがたいことに多くの方々に話題にさせていただく機会にも恵まれました。

しかし、こういった活動の一方で、私たちは時に「キャラクター人気に頼る弱小プライベーター」と揶揄されることもありました。事実、どれだけ挑んでも最高順位の結果は3位止まり。悔し涙をのむシーズンが何年も続きました。それでも、レースを始めた以上、いつかは表彰台の頂点に立ち、応援してくれるみんなと最高の笑顔を分かち合おう—その夢だけは諦めたことはありませんでした。

2026年、私たちは「本気で勝ちにいくチーム」を創るため、BMW M4 GT3とミシュランタイヤという勝負のパッケージを導入しました。そしてついに、ここ鈴鹿でポール・トゥ・ウィンという完璧な形で、悲願の初優勝を果たすことができました。

今回の勝利は、マシンやタイヤの力は勿論のこと、更に提携する中日本自動車短期大学(NAC)の学生メカニックたちの努力の結晶でもあります。

プロの厳しいレースの現場で、現役の学生たちにタイヤ交換という大役を任せることには、当然ながら賛否両論がありました。私たちはそんな学生たちと共に、かつてベストメカニック賞も受賞いたしました。今回も彼らは重圧に打ち勝ち、完璧なピットワークを披露してくれたのです。その誇りと技術が、今の若い世代にも確実に受け継がれていることを、彼らは自らの腕で証明してくれました。

『侵略!イカ娘』から始まり、この『ウマ娘 プリティーダービー』へ——。これまで、数多くの素晴らしいコンテンツとのコラボレーションを通じて、本当にたくさんのファンの皆様が、私たちの「サポーター」へと変わってくださいました。その一人ひとりの温かい手が、弱小だったプライベーターの背中を押し、今日の栄光へと導いてくれたのだと確信しています。

17年間、どんな時もチームを信じ、共に歩み、支え続けてくれたすべてのスポンサー・サポーターの皆様に、心からの敬意と、言葉では尽くせないほどの大きな、大きな感謝を捧げます。本当に、ありがとうございました。



総監督 小林弘和

チーム初のポールポジション、そして初優勝をポール・トゥ・ウインという最高の形で達成することができ、本当に嬉しく思います。ここまでなかなか結果につながらない時期もありましたが、ようやく大きな結果として実を結びました。富林選手、藤原選手ともに素晴らしい走りを見せてくれましたし、NACのメカニックもプレッシャーのかかるなかで完璧な仕事をしてくれました。特に今回を最後に卒業を迎える学生たちと、この初優勝の喜びを一緒に分かち合えたことも本当に嬉しく思います。ミシュランタイヤさんをはじめ、スポンサー、関係者、そして長らく応援して下さったファンの皆様にも本当に心から感謝しております。今回ようやくひとつ結果を残すことができましたが、これを一度きりで終わらせることなく、この勝利を自信に変えて、次戦以降もまた全員で喜べる結果を掴めるよう、さらに強いチームを目指して取り組んでいきたいと思っています。引き続き温かいご声援をよろしく願いいたします。



富林勇佑 選手

僕自身、予選Q2を担当するのも久しぶりで緊張しましたが、藤原選手が予選Q1を2番手で通過して最高のアタックを見せてくれたので、それがすごく励みになりました。今回は上位が狙えるチャンスがあるという状況だったので、いい意味でプレッシャーを受けつつも、自信を持ってアタックに行けました。ポールポジションを取ることが出来て、本当に嬉しかったです。決勝でも藤原選手が、経験が少ななかでもスタートをうまく決めてくれて、今彼が持っているものを全て出し切ってくれているような好ペースだったので、僕自身もそれに応えようという想いで走り抜きました。今までなかなか勝てるチャンスが巡ってこず、普段ポイントを取るのもなかなか難しい状況が多くありましたが、少しでも早く走れるようにエンジニアを始め、メカニック達も細かく煮詰めてくれたことが今回の勝利に結びついたと思います。このチームだったら勝てると思っていたし、今回こうして実力でポールポジションを獲って、ぶっちぎりで優勝できたことでチーム力を証明できた一戦でした。本当に勝つことができて嬉しかったです。



藤原優汰 選手

予選ではとても安心して攻めることができたので、本当にいい環境とクルマを作ってくれたチームの方に感謝しています。自分自身も予選Q1を担当して、しっかりと富林選手にバトンを渡すことができましたし、富林選手もそのバトンを活かしてポールポジションを獲ってくれたので、本当に嬉しいです。決勝でも初めてのポールスタートで、とても緊張していましたが、先頭にしか味わえない前の景色はとても良かったですね。走り出しからタイヤもクルマもとても良く、安心して攻められるようないい状態でした。開幕の時から自分自身のパフォーマンスも全く足りていないと感じていましたが、富林選手と久保選手にいろいろ教えて頂きながら、取り組んできたことを出し切ることが出来ました。今回はようやくそれが結果に繋がったので、とても嬉しいです。ですが、まだできることはあると思うので、しっかりと磨いていきたいですね。全員の努力が実り、優勝できて本当に嬉しいです。関わって頂いたすべての方にとても感謝しています。



PARTNER



© Cygames, Inc.



Motorsport



SPONSOR

